

たと記憶している。かなりばてておられた様子であった。先生は標本の採集をされ記録を綿密に取られたが、尾崎先生の寝袋と雨具が先生の足を遅くしたのだと私は思っている。この雨具も寝袋も日本製ではなく進駐軍の中古であった。どうしてこの装備を手に入れたかは知らない。先生はずいぶんこの装備を自慢しておられた。なるほど、この寝袋には羽毛が入っていた。縫い目が破れて羽毛が出ていたと記憶している。雨具は大きすぎてこれを尾崎先生が着られると黄金バットの様であった。

調査の七つ道具のほかにハーモニカを携行されて懐かしのメロディを聞かせて下さった。この夜の曲目までは記憶にないのが残念である。

赤谷コースの調査隊は十名以上だったと記憶している。予定の調査を終了して全員元気で下山して石沢先生の出迎えを受けた。今は昔の思い出である。

飯豊山の外に、尾崎先生は環境庁の植生調査を瀬波海岸、桃崎浜、村上市のお城山を担当され、私も尾崎先生のお手伝いをさせていただいた思い出があります。

「むかご」などを基に年号を入れた文章を作るのが正しいのですが、その時間の余裕がないので私の記憶だけで書いたことをお許し下さい。

## 杵 差 岳

### 関 省 吾

尾崎先生と初めてお会いしたのがいつであったか、どうしても思い出せない。おそらくじねんじょ会が発足した、昭和39年(1964)ころであったはずである。いつの間にかごく自然にあちこちの山へご一緒するようになり、池上先生と共にじねんじょ会の顧問として、長い間、会を見守っていただいた。

先生はあの細い体で飄々と山を歩き、夜の勉強会ではよくハーモニカを吹いて、会を盛り上げてくれた。体を前後左右に振りながら気分を出してハーモニカを吹く姿を昨日のこのように思い出すのである。

先生とご一緒した山で、最も思い出深いのは杵差岳である。池上先生と尾崎先生が昔、杵差岳に登ったところ、山頂の小屋が倒壊していて、やむなく隙間にもぐって一夜を明かした話とか、西俣川で池上先生が川に流された話とかよく聞かされていた。

じねんじょ会で杵差岳に初めて出かけたのは、昭和44年(1969)である。2回の予備調査を経て、尾崎先生がリーダーとなって、19名という大部隊で8月4日から本調査に入った。東俣川から登り、西俣川に下るといふ計画であった。8月4日、カモスの泊場で幕営し、8月5日、杵差岳を目指して登山を開始した。ところが、カモス峰の急登で雨

が降り出し、次第に暴風雨となっていった。

カモス峰を越え、千本峰のあたりで進めなくなり、激しい雨の中でどうするか相談した。

細かいことは忘れたが、杵差岳に何回も登っている尾崎先生は、危険な場所はないのでいくら遅くなくても小屋まで行こうといわれた。私は、荷がかなり重く、上に行けばさらに風雨が強くなるから、このあたりで泊った方がよいと主張した。結果として、千本峰の海拔1,160m付近で、やぶの中にもぐって一夜を明かすことになった。非常食を食べ、かなりの急斜面にテントにくるまって、ずり落ちないようにふんばっての一夜は長く、まさに地獄であった。次の朝、小雨の中で朝食もそこそこに出発した。間もなくまた激しい雨となり、植物どころではなく、ほうようにして前杵差岳の登りを過ぎ、命からがら杵差小屋にたどり着いたのであった。小屋は荒天のため、超満員で身動きもできぬ有様であった。

8月7日は暴風雨の中、鉾立峰まで行ったが、すぐに小屋に逃げもどった。8月8日、雨の中を大熊小屋まで下り、8月9日、大石に下山した。8月5日から8日まで、まさに集中豪雨の中心地にいたようで、じねんじょの夏合宿では最も悲惨な山行であった。

千本峰のビバークが正しかったのかどうか、尾崎先生と話す機会はついになかったが、どちらにしてもかなり危険な状況にあったことは確かである。幸い、あまり離れず、全員がまとまっていたのが良かったのであろう。

ビバーク地点で、カボチャなどの投棄事件があったことは後で知った。また雲母温泉音頭が作られたのもこの夜であったと思われる。

この合宿の成果は、じねんじょNo.6(1971)に尾崎先生の編集でくわしく報告されている。

2回目の杵差岳調査は平成11年(1999)の夏合宿として計画された。8月4日、関川村の道の駅(桂ノ関)に集合し、東俣彫刻公園に移動し、幕営した。尾崎先生と高橋(庄)さんは先行して、カモスの泊場まで行くとのことで、元気に出発していった。(この日、小千谷では39.5℃を記録した)

8月5日、杵差岳を目指して6時半ころ、林道終点を出発した。ものすごい暑さで休んでは水ばかり飲んでいる。10時半にカモス峰、途中、昼食をはさんで午後2時すぎ、ようやく千本峰に着く。前回のビバーク地点と思われるあたりをよく眺めたが、よくもこんな所で一夜を耐えたものと感じ心した。

2ℓの水を飲み干して、完全にバテて一行からは大きく遅れてしまい、前杵差岳の長い登りを休みながらよろよろと歩いていた。

この時、前方に人影があり、なんとか頑張って追いついたら、先行した尾崎先生であった。

ゆっくりではあるが、マイペースでしっかり歩いておられる。しばらく一緒に歩いたり、休んだりして、先生から貴重な水を恵んでもらい、本当に命拾いをしたような気がした。

5時少し前に前杖差岳に着き、少し元気を出して、午後6時ようやく杖差岳に到着した。

小屋に着いて、先着の人達が遠い水場から汲み上げてくれた冷水のうまかったこと。

8月6日、朝食後、小屋周辺を散策する。

よく晴れて、雄大な景色と咲き乱れる高山植物を堪能した。9時半ころ、もう一泊する先生と杖差岳山頂で別れを惜しんで下山を開始した。わざわざ見送りに来てくれた、高橋さんとも池の所で別れ、観察しながら、ゆっくり下る。登りもつらかったが、下りもつらく、一歩ごとに暑さが増す。休んでばかりいたので時間がかかり、幕営地に戻ったのは、なんと6時半、すさまじい虻と蚊の襲撃が待っていた。

8月7日は車で大石ダムまで下り、歩いて西俣川に向かう。トンネルの入口で、“大したもん蛇”をしばらく見学した。登山の疲れともものすごい暑さで、日陰を探して休んでばかりいた。ようやく目的の黒手沢に入ったが、すぐ滝に阻まれてしまい、ここで大休止（昼食）して引き返した。（軟弱だ！の声あり）

5時ころテントに戻り、すぐ道の駅の温泉に行った。6時すぎにテントに帰ったが、丁度そこへ尾崎先生と高橋さんが到着した。

先生は疲れた様子ではあったが、お元気で杖差岳の最高峰登山者（75～76才）として全員の拍手で迎えられたのであった。

本隊は猛暑に耐え切れず、8月8日、朝食後、早ばやと解散した。（参加者のべ14名）

じねんじょ会にとっては集中豪雨と猛暑に苦しめられた杖差岳だが、先生にとっては何回も登り、特に思い入れの強い山であったように思われる。その山へ、高橋さんの献身的なサポートがあったとはいえ、ご高齢にもかかわらず自分の足で登られたことに執念のようなものを感じた。山頂で2泊して心ゆくまで飯豊の山々を眺め、咲き誇る花々を写し、さぞや満足されたにちがいない。

今も、先生は杖差岳のお花畑をニコニコと散策されているような気がしてならない。

尾崎先生、ありがとうございます。

## あまりにもお世話になった尾崎先生

関 繁 雄

私の家は越後線寺尾駅のすぐ近く、先生のお宅は西小針

台で、歩いて10分程の距離だった。よくお宅にもお邪魔してお世話になった。

じねんじょの観察会の時は先生の車に乗せて戴くことが多かった。そもそもじねんじょ会に入会させて戴いたのも、石沢先生にお願いして理学部に内地留学できたのも先生のお力添えのお蔭だった。

尾崎先生との思い出は一杯ある。何をどう書いて良いか分からない程だ。

今、新潟から遠く離れていても、私が植物について一生の関心ごとでいられるのも、その切っ掛けは尾崎先生との出合だった。先生のお蔭で石沢先生、池上先生、関省吾先生、牧野先生はじめすばらしいじねんじょ会員の方々にお逢いできたのだ。

先生とのお付き合いの始まりは昭和47年。私が柏崎より新潟市の県立新潟養護学校はまぐみ分校に転勤して、四年後だった。当時私は新潟の自然は、お寺や神社の境内に残っているのではないかと思って、寺社林の研究をしていた。

だが難点は植物の同定に自信がなかった。

誰か良い方がおられないかと、学校の同僚に尋ねた所、市の宮浦中学校に尾崎先生という方がおり、たいへん植物に詳しいとのことだった。

早速電話を入れ面会を申し込んだ所、快く承諾下さり、私の悩みを聞いて下さった。終始笑顔を見せながら。話の中で先生が西小針で、拙宅に近いことも判り、また吃驚。

次に116号線が出来た頃の頃、ホンダオートの旧店で出逢った。先生が軽の自動車を買われ、社長の藤井さんと親しかったからだ。判らない標本やら、大急ぎでまとめた市内神社林を持参した。先生はそれを見られ、「もしこれを続けられるなら「じねんじょ会」に入って研究された方が良いと思うし、新潟大学理学部に石沢先生という若い優秀な先生がおられるので、内地留学をしたらどうですか、もしよろしかったら、石沢先生とはじっ懇の仲なのでお願いして見ますが」と薦められた。

また池上先生を頂点とする「じねんじょ会」の素晴らしさをも宣伝された。私は小踊りして喜んだ。ウンもスンも無かった。内地留学と「じねんじょ会」入会をお願いした。

こうして二つが実現した。内地留学では石沢先生に初めて理学部の研究室でお逢いした。

市内の寺社林のまとめを持って、先生は内留を承諾して下さいました。先生といろいろお話をした。池上先生の素晴らしさを話されたこと。それから即物の変容。例に太平洋側のニシキギが日本海側にくるとコマユミとなって翼が無くなると話された。ナルホド、ナルホド流石大学の先生は研究が深いと感心した。

尾崎先生はそのうちに家を改築された。素晴らしいお宅になった。応接室は素晴らしく、冷暖房が備わり、ふかふ